

ワークショップ【第1室】	
①中学校のコミュニケーション能力の基礎を育成する指導と評価 加藤 京子 先生 (兵庫県三木市立緑が丘中学校)	文字指導や発音指導、文化差への気付きを促す指導などを丁寧に行ないつつも英語使用に際しては一貫してディスコース重視で臨む中学1年入門期から、時事的な話題を扱ってもしっかり意見を述べパラグラフを構成して書く力を持ちそしてコミュニケーションへの意欲と自信を持つ3年生に育てるまで、どのような観点から指導と評価を行っていけばよいかを提案したいと思います。
②小学校外国語活動におけるコミュニケーション・自己表現活動の進め方 田邊 義隆 先生 (近畿大学)	「コミュニケーション・自己表現活動」と一口に言っても、単元のねらいやそこで扱う題材に合わせて適切な活動形態を選ぶ必要があります。また、活動設計段階や実際に活動させる際に留意すべき点も多々あります。小学校の先生方には目の前の子どもたちに豊かな言語活動に取り組ませるために、また中学校の先生方には新入生の英語学習経験を踏まえた入門期の授業設計をするために、理解しておきたいポイントをワークショップ形式で紹介いたします。
ワークショップ【第2室】	
①4技能を統合的に伸ばす授業のヒント 東谷 保裕 先生 (立命館宇治高等学校)	来年度から新学習指導要領が全面的に実施され、今まで以上に「4技能を総合的に育成する指導の充実」が求められています。このワークショップでは、参加者の方にインプットからアウトプットにつながる様々な指導方法を自ら体験していただくことにより、よりコミュニケーションで4技能を統合した授業をしていく上でのヒントをつかんでいただけたらと思います。具体的な事例として、実際の授業を撮影したDVDもご覧いただく予定です。
②コミュニケーション能力育成のためのステップとクラスづくり 竹下 厚志 先生 (神戸大学附属中等教育学校)	EFL環境で、コミュニケーション能力を育成するには学びの環境づくりが大切です。英語が得意な生徒が一部だけで、その他の生徒が英語学習に消極的な状態が続いている限り生き生きとした授業は難しく、結果として英語力の伸びはあまり期待できません。そこで、どのようなステップを踏めば、クラス全体が英語学習に意欲的に取り組み、コミュニケーション能力の育成につながるかの一例を紹介します。
ランチョン・セミナー	
Instructed SLA の課題と展開 山岡 俊比古 先生 (兵庫教育大学大学院)	SLAの誕生と最近のInstructed SLAの重視を教室からの離脱と教室への回帰としてとらえ、Instructed SLAのstate of the artをFonFにあるとします。ついで、FonFで学習者が行うことをconsciousness-raisingとnoticingをからめて吟味し、その結論を用法基盤モデルで言うpattern findingと同じであるとします。最後に、FonFとFonFSの関係、SLAのSが持つ意味について今後の展開という観点から論点を提供します。
外国語教育においてICT・国際交流はいかなる役割を果たすか 吉田 信介 先生 (関西大学、関西英語教育学会会長)	ICTの教育への利活用により、情報活用能力を向上させ、新しい知的価値、文化的価値を創造できる21世紀型の社会を構築する基盤を形成することがこれからの教育現場に求められている。そのような中、国際交流プロジェクト(Asian Student Exchange Program, World Youth Meeting)では、ICTと英語を駆使して、自ら深く活動と関わり合い、課題を発見し、多様な意見に耳を傾けながら交渉し、問題解決を導き、結果を評価する総合的な学びの場を提供している。ここでは、活動を通じて得た知的価値、文化的価値、英語教育への示唆について実例をあげながら考察する。

研究発表・事例報告【第1室】	
① [研究発表] 「外国語活動」小中連携に向けたアンケート調査 ―小学生・中学生・教師の三つの視点から― 牧野 真貴 (近畿大学) 和田 博之 (高槻市立上牧小学校) 河内山 真理 (関西国際大学)	本研究の目的は、同一中学校区にある小学校2校の児童、教師、および2校を卒業した中学生に実施したアンケート調査の結果をもとに、外国語活動における改善すべき点を明らかにし、小中連携に向けた具体的な取り組みを検討することである。アンケートのデータを量的に分析した結果、2校の間には、「小学生・中学生：英語を話すことに対する不安」、「教師：指導に対する意欲」に有意な差が見られた。また、中学生は外国語活動の経験が中学校英語に有用であったとは感じておらず、教師との意識のずれが確認された。さらに、学校については、2校ともに指導力養成の問題や教材開発の時間不足等、外国語活動を指導する体制が十分に整っていないことが確認された。以上の結果より、(1)2校の教師が授業研究会等で交流し、情報交換や指導案を共有し、指導に対する不安を軽減する、(2)指導では音声面を強化し、児童が英語を口にする機会を増やして、中学校英語にスムーズに入れるようにする、(3)学校の体制については、教材を共有することにより教師の負担を軽減し、研修会や外国語活動成功事例のビデオ視聴で指導力を養成する、等の具体的な取り組みを提案した。
③ [研究発表] リフレクティブ・プラクティスにおける気づき(awareness)概念とその特徴について ―ジャーナルの談話分析をもとに― 玉井 健 (神戸市外国語大学)	本発表は、教師の成長過程における気づき(awareness)という一つの変容事象に至る過程に焦点を当て、これまで十分に捉えられてこなかった概念の解明を目指す。気づきは、Teacher beliefを支える中心概念と位置づけられており(Freeman, 1989)、教師の成長に深い繋がりを持つと考えられる。本研究では、リフレクティブ・プラクティスを通して教師が「気づき」に到る、あるいはそういう状態として認識する時、ジャーナル・テキスト中にそれがどのような記述として現れるかを、文脈、言語表現に注目しながら検討した。具体的には三人の英語教師のジャーナルに対して談話分析を行い、記述にどのような変容が起こるかを縦断的に分析した。結果、気づきは静態的に捉えるものではなく、前後の文脈を通した流れの中で考えられるダイナミックな現象と捉えられた。特徴は、1)塊(mass)から個(individual)へと向かう学習者を見る視点のシフト、2)個の記述の濃密化、3)前触れとしての自問的記述(self-inquiring description)の現れ、4)自己に対するメタ認知的記述の現れの四点に集約された。
④ [事例報告] PAC分析による「逆向き設計」の効果 高見 砂千 (大阪市教育センター) 吉田 晴世 (大阪教育大学)	本研究では、公立中学校の英語科教員を対象としたPAC (Personal Attitude Construct：個人別態度構造)分析を通して、「逆向き設計」をふまえた英語の授業設計の意義を明らかにしようとした。教職経験年数と「逆向き設計」による授業実践の経験の有無がそれぞれ異なる英語科教員6名に対して、「指導計画の作成にあたって重視する事項」についてPAC分析を実施した。自由連想、連想項目間の類似度距離行列によるクラスター分析などを通して検証した結果、教職経験年数の比較的少ない教員においては、指導計画の作成の際には長期の見通しよりも指導方法の具体的な内容に意識が注がれる傾向が認められた。また、教職経験年数が比較的長い教員においては、「逆向き設計」の経験の有無にかかわらず最終到達目標の意識が表出した。しかし、「逆向き設計」の経験がない教員からは評価に関する項目が表出しなかった。

	したがって、明確な目標・評価・指導を明確に位置づけた「逆向き設計」は、英語科の授業を構造的に支えるとともに、とりわけ若手・新任教員の支援に効果が期待できることが示唆された。
研究発表・事例報告【第2室】	
①【研究発表】 Collaborative and independent writing among Japanese university EFL learners 渡辺 裕子（トロント大学大学院生）	“In this presentation, I will discuss a research proposal that examines the effects of collaborative and independent writing in L2 (second language) learning among Japanese university EFL learners. Despite the recognized importance of peer-peer collaborative dialogue in L2 learning, the use of pair and group work in L2 classrooms seems limited to oral tasks. Peer-peer interaction aiming for writing development is quite rare, particularly in foreign language writing classes. Although collaborative writing – two or more writers working together to produce a text – has been widely practiced and researched in L1 (first language) contexts with positive research findings, SLA (second language acquisition) researchers have recently begun to explore the effectiveness of collaborative writing in L2 learning. Therefore, the proposed research investigates the relationship among the university EFL learners’ verbal processes while writing, the quality of the text they produced, and their reflections of writing experiences in two writing conditions: one in which learners write with their partner (collaborative writing), and one in which the same learners write alone (independent writing). Using sociocultural theory (SCT) as a framework, I will document how the same learner engages in collaborative and independent writing, through the analysis of collaborative dialogue and think-aloud protocols while writing, how these processes mediate the quality of text produced and L2 learning, and how the learners feel about writing in pairs and independently.”
②【研究発表】 海外英語研修が音声言語の処理能力にもたらす 効果：ディクテーション課題とストーリーテリング課題に基づく一考察 森下 美和（神戸学院大学）	日本人の TOEFL® iBT の平均スコアは世界平均を大きく下回っており、それに伴い、昨今では海外の大学等への留学者数も減少の一途をたどっている(Institute of International Education, 2010)。しかしながら、必ずしも留学に興味を持つ学生が少ないというわけではなく、夏季休暇等を利用した短期の海外研修制度を設けている大学も目立つ。短期留学の効果を検証し、さらに長期留学へとつなげるヒントを得るためには、様々な観点から調査を行う必要がある。本研究では、海外英語研修の効果について音声言語の観点から考察するため、20名の研修参加者(CEFRのA2レベルの大学生)に対し、研修の前後にリスニングとスピーキングのテストを行った。リスニングテストには Minimal English Test というディクテーション課題(Maki et al, 2011)を使用し、事前・事後テスト間の正答数を比較した。スピーキングテストには 6 コマ漫画を用いたストーリーテリング課題(Heaton, 1966)を使用し、Range (Nation, 2004)により token (発話総語彙数) と type (異なり語数) を比較した。t 検定(両側)の結果、いずれの課題においても、事後テストのスコアが有意に伸びていることが分かった。このことから、3週間程度の海外英語研修であっても、音声言語の処理能力が向上した可能性が示唆された。

③ [研究発表] 英語分節音のイメージとジャズ楽曲歌詞の関係 中西 のりこ (神戸学院大学)	言語音に何らかの普遍的なイメージがあるということは、オノマトペや共感的音象徴の研究などで広く議論されてきている。本研究では、「特定の英語分節音グループの響きが特定のイメージを喚起する」という仮説を、スタンダード・ジャズ楽曲の分析を行うことで検証した。はじめに、英語の分節音を調音法によって「前舌母音」「無声閉鎖音」など10のグループに分類した。次に100の楽曲歌詞に含まれる約13,000語をIPA表記で書き起こし、上のどのグループの分節音がどの曲に高い比率で含まれているかを算出した。その結果、「前舌母音の比率が高い曲は、明るく、幸福感を表現するような曲が多い」「無声閉鎖音の比率が高い曲は、リズムよく前進する感じを表現するような曲が多い」のように、10の分節音グループそれぞれに何らかの傾向が見られた。この結果を生かした発音指導法として、発表時には、学習者が分節音の響きをイメージしながらジャズ楽曲を題材にして発音練習をする様子を紹介する。
④ [研究発表] 認知言語学的手法を英文法教育に用いることの有効性 松田 拓之 (洛南高等学校・附属中学校) 赤松 信彦 (同志社大学)	近年、英語教育の場において、認知言語学的手法が注目を集め(e.g., Langacker, 2001; Ellis & Gadierno, 2009), 認知言語学的手法を取り入れた英語学習書が数多く出版されるなど、その有効性を主張する者は多い。しかしながら、認知言語学的手法が英語教育に及ぼす効果について、実証研究はほとんどなされていないのが現状である。本研究は、英語学習者に対する英文法指導において、認知言語学的手法がどれほど有効であるのか調査した。英語を専攻しておらず、一度も海外在住や海外留学の経験がない84名の大学生が本研究に参加した。彼らに、認知言語学的手法によって、同じ日本語訳(「上に」)が当てはめられる3単語(above, over, up)の使い分けを学習させ、事前テストと事後テストの点数を比較検証した。その結果、aboveとupに関しては正の学習効果が認められたが、overについては負の効果が認められた。実験結果から、単語の核となる意味(Core Sense)と、そこから派生する意味(Peripheral Senses)との距離、およびその広がりによって、認知言語学的手法の効果に差が現れる可能性が示唆された。
研究発表・事例報告【第3室】	
① [研究発表] 音読指導の基礎の基礎：音読前確認作業を視座に 高橋 昌由 (大阪府立園芸高等学校)	先生方の授業を拝見して、「音読に先立つ語(句)と文に関する音声と意味の『確認作業』」(以下、確認作業)が不足していると感じることが多い。これが本研究の端緒である。本研究では、音読活動に関して、その確認作業の質と量を視座に、英文記憶保持の効果を考究する。英語力が等しい3群の高校生に、同じ難易度の2英文(＃1と＃2)について、暗唱を含む音読活動を実施した1週間後に、その2英文の記憶の保持をテストした。この音読活動の取り組みを合計3回実施した。各回の2英文のうちの1英文の音読活動は、群間で次の3とおりの異なる方法で実施した：①＃1のみ確認作業実施、②＃2のみ確認作業実施、③＃1および＃2に確認作業実施。テスト結果を基に、英文記憶保持に関して次について統計的に推計した：1) 各回の1つの群内における2英文における差(9事例)、2) 1英文における群間の差(すなわち上述の①、②、③による差で、6事例)。分析の結果、多くの事例において有意差が確認されたことから、音読活動の確認作業

	が英文記憶保持をたすけることが実証されたと考える。よって、音読活動における音読前の十分な確認作業の実施を提案する。
② [研究発表] 音読による多読実践学習者の体験プロセス 西田 晴美 (東京農業大学)	本研究では、多読を黙読によってだけではなく音読によっても実践すると、学習者の読みはどのように変化するのかに焦点を当て、多読実践学習者の体験プロセスをたどりながら、読みの流暢さが構築されていく過程の解明を試みる。2名の対象者による2か月間の多読実施後、質問紙調査とインタビューを行い、そのデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の方法を用いて分析することにより質的研究を行った。学習者は多読中「未知語が多い」「状況・展開がつかめない」などの内容が理解できなくなるような困難を抱えるが、それに対処しながら多量のインプットを処理するうちにそれに慣れて処理が自動化し、読解速度と理解度が向上することが示された。音読に関しては、正しい発音・リズム・イントネーションに注意を払って読めば、繰り返しによって音声面の流暢さを獲得することが確認された。音読によって多読を実践すると、語彙、統語構造、および音声学の理論などの明示的に学んだ知識の意味処理を繰り返し行うことになる。これによって知識の処理過程の自動化が促進され、その結果、流暢さの獲得に貢献できるところに多読の意義を確認できた。
③ [研究発表] TPR を使った受動態の指導 浅井 玲子 (京都外国語大学大学院生, 京都府立南丹高等学校)	従来よく行われており、筆者も行ってきた英文法の指導法は、ターゲットにした文法項目を含む英文を板書やプリントなどで提示をし、日本語で説明をし、意味を確認した後に音読をして、練習問題を解かせるといったものであった。この方法では一時的な理解・定着は見られるものの、一定時間がたつと定着が薄れたり、いざライティングなどで使用させようとするとう理解もあやふやだったりといった傾向が見られた。そこで、TPR を使って文法項目を指導したら理解はもちろんのこと、定着についても効果が見られるのではないかと思い、実験を試みようと考えた。TPR をすべての文法項目に適用することは難しいかもしれない。しかし、授業に実際に取り入れてみると、かなり応用範囲が広いことがわかった。今回の発表については、「現在進行形および現在完了の受動態」である。筆者の従来の方法による指導と、TPR を活用した指導のどちらが理解及び長期間の定着に効果的かを調べた結果をもとに、考察した内容を発表する。
④ [事例報告] グローバル社会でのコミュニケーション能力を育成する実践 ―高等学校「総合的な学習の時間」を活用した横断的学習― 大塚 智恵 (元愛知県立岡崎北高等学校)	近年の日本の英語教育では実践的コミュニケーション能力を養うことが一層重視されている。また、高等学校の「総合的な学習の時間」では「国際理解、情報、環境、福祉・健康など横断的・総合的な学習などを実施する」ことがねらいとされている。本実践では、高等学校の「総合的な学習の時間」において、グローバルな視野を持った国際理解や情報発信を目指し、英語を用いた横断的学習を行い、世界の環境問題に関する英文や生徒自身が掲げた国際理解に通じる課題について、英語で意見をまとめ、調査や議論を重ねた上でスピーチを行う学習を実施した。1年間の授業を通して、高校生がグローバル社会でのコミュニケーションについて実践的に学び、英語を活用して意見を発信する力を高める過程について考察した。実践後のアンケート結果より「問題について調べ考えた上で、意見を発表することに対する興味・

	関心が高まったと思う」生徒は 70%を占め、「意見をまとめ、表現することが上達したと思う」生徒は 75%に上った。また、英語を活用した読解力や意見をまとめる力、調べ学習に対する意欲や、英語のスピーチによって意見を伝えたり聞いて理解する力が高まることがわかった。
研究発表・事例報告【第4室】	
① [研究発表] FileMaker Go を利用した iPod touch/ iPhone/ iPad 用英単語学習アプリとその開発について 神谷 健一 (大阪工業大学)	2012 年 4 月に市販データベースソフトウェアの FileMaker のバージョンアップが行われた。この最新版である FileMaker 12 を使うと、App Store で無料提供される FileMaker Go をインストールした iPod touch/iPhone/iPad で動作するアプリケーションを開発することができる。発表者は過去 10 年にわたって FileMaker を利用した教材作成・授業支援ツール類を開発しており、http://www.oit.ac.jp/ip/~kamiya/ で開発成果を無料で公開してきたが、今般の FileMaker のバージョンアップにより iOS 対応デバイスでも利用可能なアプリ開発が可能になったことは朗報である。また iPod touch、iPhone、iPad を所有する学習者はこうしたアプリを無料で導入することができる。本発表では教員が Excel 形式で入力した単語リストを FileMaker を使って無料アプリに変換することができるツールの試作版を公開し、Dropbox と短縮 URL を用いて学習者に簡便に英単語学習アプリを配布する方法について実演を交えて紹介する。
② [研究発表] 携帯ゲーム機を使用した授業が学習者の英語能力や興味・関心に及ぼす効果 中島 正恭 (八幡市立男山第三中学校)	これは携帯ゲーム機を使用して英語の授業を行った結果、生徒の英語能力は改善したのか、携帯ゲーム機を活用した授業に対する興味・関心は高まったのかについて考察したものである。毎日 10 分間、学習者が現在使用している教科書の内容に沿ったソフトを利用して、4 ヶ月間学習した中学 2 年生と携帯ゲーム機を使用しなかった学習者の英語の能力を比較した。両グループに聞き取り・文法・語彙に関するテストを 11 月と 3 月に実施し両グループの差を分散分析で検定した。その結果 3 つのテストにおいて有意差は生じなかった。しかし、携帯ゲーム機を使用した学習者へのアンケート調査から多くの生徒は携帯ゲーム機に対して肯定的に捉えていることがわかった。22 項目のアンケート調査を因子分析にかけ、その後回帰分析を行った。その結果「携帯ゲーム機で学習意欲が向上したと思う。」「携帯ゲーム機で英単語の勉強が楽しくなったと思う。」「携帯ゲーム機で英語力が上がってきたと思う。」の 3 項目は携帯ゲーム機の持っている特徴である「効果的な多機能・楽しい活動」の影響を強く受けていることがわかった。以上から携帯ゲーム機を使用した学習は生徒の興味・関心を高めるのに効果的な指導法であると考えられる。
③ [事例報告] 英語カリキュラム開発及び改善における学生のニーズを考慮することの重要性 —EGP プログラムを採択している私立女子大学の一事例研究— 森永 弘司 (同志社大学) 池上 久美子 (同志社女子大学)	学生のモチベーションを高めるような配慮をおこなうことが、英語学習の成否を左右する重要な要件であることは異論の無いところであろう。しかしながら、現在カリキュラム作成に際して、学ぶ側の学生が大学での英語教育に期待するニーズに関しては十分な配慮がなされているとは言い難い場合が多いように思われる。今回の発表では、学生のニーズの観点も取り入れることで現行のカリキュラムの短所や長所が判然とし、将来的なカリキュラム改善に資することをニーズ分析調

	査紙の結果にもとづいて報告し、さらに問題点改善のための提言もおこないたい。参加者は関西地区の女子大学の1年次生205名で、ニーズ分析調査紙として88項目の詳細な質問項からなるJack C. Richardsが作成した質問紙を使用した。この調査の結果の一例として、この大学のカリキュラムにおいてはリーディングがかなり大きな比重を占めているが、学生が卒業後に就きたいと思う仕事での重要度が一番高いのはスピーキング能力であることが判明したので、従ってスピーキング活動を多く取り入れた授業を今後増やしていくことが望まれる。詳細な結果の報告とカリキュラム改善のための提言は発表時に報告する。
④〔事例報告〕 コミュニケーション能力育成のための教授法研究と教師の指導力向上研究 一宮崎県教育研修センターとの協働プロジェクト 伊勢野 薫（宮崎大学大学院）	新しい指導要領では、中学では4技能を統合したコミュニケーション能力の育成が求められている。また高校でも英語の科目名が「コミュニケーション英語」に変更され、しかも英語で授業をすることが要求されている。このような変更に対応するため、宮崎大学大学院教育学研究科では、宮崎県教育研修センターと協働で、平成19年度以来「英語教員指導力向上プログラム」を課題別研修に取り入れ、中学・高校の英語教員の研修を実施してきた。昨年度からは、科研費の補助を得て、このプログラムをさらに発展させ、発表タイトルにあるように、新しい指導要領で求められている指導力を育成し、リフレクティブ・ティーチングの研修を通し、CLTの実践を教師が内省的かつ客観的に観察し、意味を発見し、さらにそれを言語化・理論化することでそれぞれの教育現場に適応できる指導力を育成しようとする取り組みに取り組んでいる。本実践報告ではこの取り組みについて報告する。